

Café des open



三浦一族

Menu 第11回

桜の名所 横須賀

文/谷合伸介(横須賀市立中央図書館 郷土資料室)

鎌倉時代、三浦半島は歴代の「鎌倉殿」が度々訪れた地でした。遊興で三崎(三浦市)、笠懸などで杜戸(葉山町)、参拝で岩殿観音堂(逗子市)などを訪問しているのはその一例です。現在の横須賀市内でも、栗浜大明神(現在の住吉神社)には、文治元年(1185)正月に源頼朝と妻の政子が、また建久6年(1195)10月には源頼家が、それぞれ参詣しています。

こうした「鎌倉殿」が赴いた場所のなかでも、特に注目したい場所が横須賀です。『吾妻鏡』の建保3年(1215)3月5日条に、「將軍家(源実朝)、花を覧んがため、三浦横須賀に御出す。相州(北条義時)・大官令(大江広元)已下数輩扈從(にしょう)す。義村一族等御駄餉(だこう)を儲く」(読み下し文)との記述があり、3代將軍源実朝が花見のため、北条義時や大江広元らとともに「横須賀」を訪れ、一行を三浦義村ら同一族が食事などでもてなしたことがわかります。「横須賀」とは、横須賀郷のこととみられ、現在の汐入・緑が丘・本町・稲岡・楠ヶ浦・泊・逸見付近一帯と考えられます。

さて、この史料は、短い一文にも関わらず、いくつか重要な情報が記されています。第一に、この文中の「横須賀」の記述こそが、現在の横須賀という地名の初見史料となる点です。横須賀の地が、歴史的に初めて確認できるのが義村に関する記述であることから、改めて横須賀と三浦一族とのゆかりの深さを感じさせます。第二に、横須賀の当時の領主は、義村あるいは三浦一族であったと考えられる点です。先述のとおり、歴代の「鎌倉殿」は、遊興や参詣などで三浦半島各所にたびたび赴いていますが、その際にこれを接待したのが三浦一族でした。義村の時代、本拠地である三浦半島は、そのほとんどが三浦一族の支配領域であったと推察されますが、この『吾妻鏡』の記述によって、史料的にも三浦一族が横須賀を所領としていたことがわかります。第三に、横須賀は、「鎌倉殿」がわざわざ足を運んでくるほどのお花見スポットであったという点です。旧暦3月5日の花見となれば、その花は桜と考えられます。つまり、横須賀は、鎌倉時代、桜の名所であったと考えられるのです。実朝は、『金槐和歌集』を編纂するなど和歌に通じた人物であり、四季の移ろいや自然の風雅を愛でるため、鎌倉やその近郊への外出を度々行っていました。例えば、建保元年(1213)9月22日、実朝は氷取沢(横浜市磯子区)を散策に訪れ、草花の秋の風情を楽しんでいます。この時、義村の他、皆和歌に心得のある者たちばかりを同行させています。管見の限り、歴代の「鎌

倉殿」のなかで、横須賀に花見に赴いたことが確認できるのは実朝のみであることから、この訪問は和歌に通じ自然を愛でた実朝ならではのものと言ってもよいのかもしれない。

では、実朝一行が花見に訪れた場所は、具体的にはどの辺りだったのでしょうか。残念ながら、それを明確に示す史料がないため、その場所を特定することはできません。しかし、この地域の江戸時代の絵図などから1つの可能性を推測することはでき、文化8年(1811)の「相州三浦郡横須賀村」絵図(横須賀市自然・人文博物館蔵)からは、当時、桜山という場所があったことを確認することができます。桜山は、現在の地名としては残っていませんが、逸見から汐入にかけての山で大変眺望のよい所であったことから見晴山ともいわれました。現在も、ここを通る浦賀道からは、在日米海軍基地などを一望することができます。実際、幕末には横須賀製鉄所のフランス人を保護するため、ここに桜山見張所が設けられました。この写真は幕末のもので、対岸の民家がある場所は現在のヴェルニー公園にあたり、その背後の山が桜山です。



慶応2年(1866)の桜山

現在、中世横須賀郷の趣きを感じることができる場所は、幕末から明治初期の横須賀製鉄所の整備やその後の海軍施設の拡張などの影響もあり、ほぼ残されていません。ご紹介した桜山が、実朝が花見に訪れた場所にあたるかは、あくまで江戸時代以後の史料からの類推に過ぎませんが、こうした場所から当時の景観に思いをはせるのも歴史ロマンの1つかもしれません。

参考文献:『新横須賀市史 通史編 自然・原始・古代・中世』(横須賀市、2012年)